

<平成 25 年 大阪府高等学校校外学習研究発表会>

日 時:平成 25 年5月 17 日(金)

場 所:ホテルアウリーナ大阪

発表校:城星学園高等学校

テーマ:「シンガポール・マレーシア修学旅行

【内容】

城星高等学校は、1999 年からマレーシア・シンガポールへの修学旅行を実施している。

シンガポールを訪問先と決めた理由は、

- ①英語が使われている地域である
- ②安全である
- ③現地までそれほど時間がかからない
- ④費用が 10 万円以下になる

との理由であった。



初期のころは部屋割りが当日までわからないことや、100 名近い団体の扱いに慣れていないなど、受入れ側に不十分な面があったが、15年後の今は日本国内とほとんど変わらないようになってきた。

また、修学旅行の内容も当初の「観光中心」から「現地の人たちとの交流体験」を取り入れたものへと変化し、今では学校間交流や現地の大学生ガイドによるグループ行動などにより、同年代だけでなく現地のいろいろな人々との交流を通して、生徒たちに強い印象が残る修学旅行となった。

海外修学旅行を実施するにあたり、参考にしたい示唆に富んだ発表であった。

詳細:月刊「教育旅行」2013 年 9 月号「連載 教育旅行」掲載

マレーシア・シンガポール 修学旅行の15年

城星学園中学・高等学校
教頭 久保 伸二



学校正面

はじめに

本校は、サレジオンシスターズというカトリックの女子修道会の創立になる幼稚園から高等学校までの総合学園である。1953年に学校法人城星学園を設置し、幼稚園・小学校が認可された。その後、1959年に中学校、1962年に高等学校の設置が認可されている。学園は、大阪城公園の南に位置し、近隣には公立や私立の中学校や高等学校があつて、大阪市内とはいえ落ち着いた文教地区となつている。幼稚園・小学校は男女共学であるが、中学校からは女子だけとなつている。本校は設立当初から「家族的な学園」を目指し、現在でも、高等学校は学年90名前後、

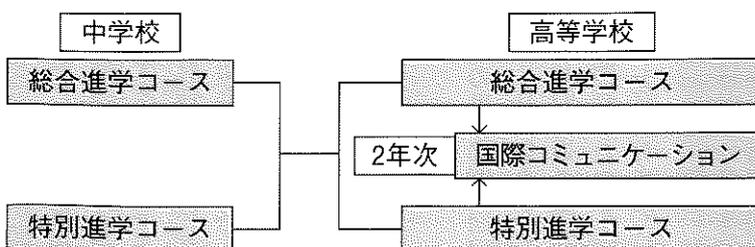
クラスの生徒数も30名を超えない小規模な学校である。学校生活においては、教員が常に生徒に寄り添い、共にいながら生徒の成長を助ける「アッシステンツァ」と言われる教育を行っている。

中学校は「総合進学」と「特別進学」の2コース、高等学校は、この2コースに加えて「国際コミュニケーション」の3コース制をとっている。国際コミュニケーションコースは、入学時の募集ではなく、生徒の進路がある程度決まってくる2年生からのコースであり、総合進学、特別進学のどちらからの選択も可能としている。

海外への

修学旅行

1998年に国際コミュニケーションコースを設置した。このコースでは3週間のオーストラリア語学研修がプログラムされていたが、教員の間には、総合進学や特別進学コースの生徒にも海外を経験させたいという機運が高まつて



いた。さらに、当時、高等学校の修学旅行は沖縄だったが、公立中学が少しずつ沖縄へ足を延ばすようになってきており、生徒の中に「中学校のときに沖縄へ行った」という声が聞かれるようになってきた。

そこで、本格的に海外への修学旅行を検討することとなった。それまで、修学旅行は、国際理解・平和教育・宗教教育を柱としていたが、それに加えて、次の点がポイントとされた。

- ①英語が使われている地域であること
- ②安全であること
- ③短い期間なので、現地までそれほど時間がかからないこと。

④それまでの修学旅行の費用(約10万円)とそれほど変わらないこと。

その結果、シンガポールが最適であると決定された。

しかし、実際に実施するにあたっては大きな不安もあった。

まず、当時海外を経験していない教員も多かったので果たして生徒を引率して行けるのか、言葉が通じない現地で生徒が、いや自分が団体からはぐれたらどうなるのか、熱帯地域であるシンガポールで暑さに対応できるのか、さらに、食べ物に合うのか、辛いものばかりなのではないか等々、体験していないことからくる不安であった。

そこで、この不安を少しでも解消するため、に該当の学年の教員のうち2〜3名が必ず事前に下見を実施することとした。これは現在

でも続いており、今では新任の教員を除いて殆どの教員がシンガポールを経験しており、下見と本体で10回近くの経験をもつ教員もいる。

初期の修学旅行(1999年)

さて、このような状況の中で始められたシンガポール修学旅行であるが、初期は海外へ行くことが目的で、そのために「観光旅行的」な色彩が濃厚であったと言える。実際、現地1泊、機内1泊の2泊4日の強行軍であった。

1日目 シンガポールへ移動

2日目 イスラム寺院・マライオン・教会・セントーサ島などシンガポールの観光

3日目 マレーシア(ジョホールバル)観光
(国境を越えることの意味あり)

その後、シンガポールへ戻り、ジュロンドバードパーク、晩にナイトサファリ……

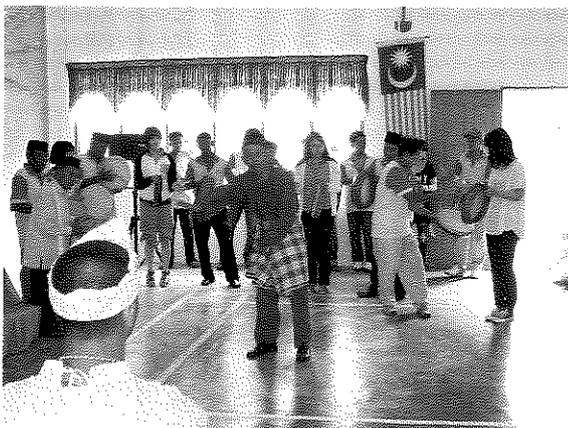
深夜の帰国便
4日目 朝、大阪着

確かに強行軍ではあったが、生徒の満足度は高く、高校時代の思い出としてシンガポールを上げる生徒も多かった。

さて、実際にやってみると、それまでの日本国内の修学旅行と違う点が明らかとなった。最初一番悩まされたのが、ホテルの部

屋割が当日にならないと分からないとされたことである。日本であれば、早くから部屋の割り当てがホテルから送られてくるので、それに合わせて生徒の宿泊する部屋を割り当てていけたのだが、シンガポールではそれができず、ホテルに到着してから部屋を割り当てていかざるを得なかった。女子校として宿泊場所の安全は最優先しなければならぬことで、この点は非常に困ったものであった。しかし、同じホテルを毎年続けて使う間に、ホテル側も私たちの要求に少しずつ応じてくれるようになり、現在ではかなり早めに部屋割がわかるようになっていた。

また、食事をする場所が100名近い団体の扱いに慣れておらずトイレの数が不足していたり、日本からみるととても衛生的とは言えない状態などもあったが、これもこの10年



ホームビジット現地での歓迎式

で飛躍的に改善されてきており、日本国内と変らない状況になっている。

さらに、最初心配された暑さも、制服にこだわらず暑さに適した私服で行動するようにしたため、問題とはならなかった。今では日本の夏は猛暑といわれて最高気温が35度を超える日が続いたりするので、シンガポールに行っても、その暑さに驚くことはない。ただ、シンガポールは建物に入ると冷房が強烈に効いていて、このことで体調をこわす生徒が出たりするので、室内の冷房対策として上着などを持って行くように指導している。

体験を取り入れた修学旅行へ (2007年)

さて、シンガポールへの修学旅行が安定してくると、観光だけではなく、「現地との交流」という声が出て来る。国際交流というところで言えば、国際コミュニケーションコースの生徒はオーストラリアで学校交流を経験しており、また、本校でも韓国や台湾からの学校との交流を体験していた。そこで、シンガポールの学校との交流を実施することとなり、日程も一泊増やすこととなった。

ところで、学校交流の時間自体は半日程度であるが、そのための事前準備に多くの時間をさくこととなった。それは、学校交流で日本の紹介などを行うようにしたからであるが、このノウハウは国際コミュニケーションコースで培ったものである。高校2年生の生徒は7月の交流に向けて2年生の1学期は準備

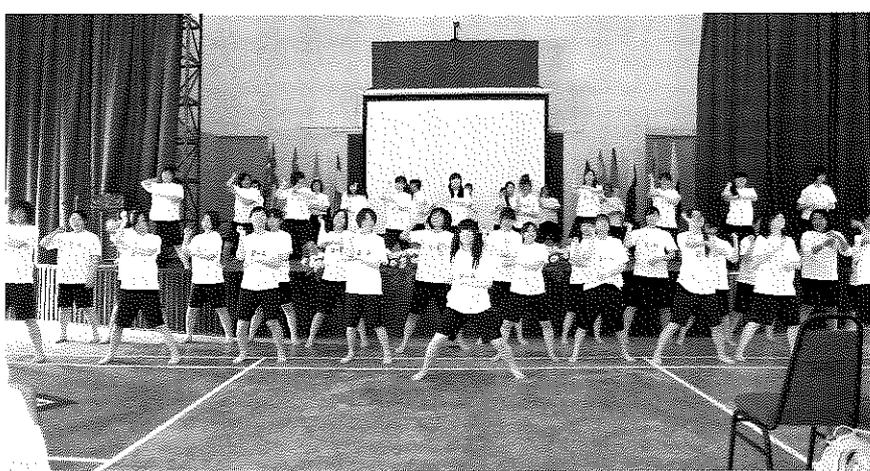


学校交流 歓迎式

備に追われる日々となる。5、6名程度のグループに分かれて、何を紹介するのかから始まり、その材料を集め、パワーポイントにまとめ、さらに英語で説明できるように準備するのである。確かに時間的には厳しいものがあるが、生徒にとつては自分たちの日常を見直す非常に良い機会となっている。

実際に学校交流を行ってみると、各グループでの文化紹介はうまくできたりできなかったりであるが、さすがは現代の若者たち、言葉は充分には通じなくてもすぐに打ち解け、メールアドレスの交換をする生徒もいる。中には、未だにメールのやり取りをしている生徒もいると聞いている。そして、修学旅行で一番印象に残っているのが、学校交流であったと答える生徒も多く、人間と人間の触れ合いの大切さ、重要性を改めて実感している。

さて、このようにして学校交流をしていると、同年代とだけでなく、現地の文化や生活に直接触れるとつと生徒に与えるインパクトが大きいのではないかとということから、これまで観光の域を出なかつたマレーシアで、現地の村へのホームビジットを2010年から実施することにした。僅か半日ではあるが、現地の人との交流は生徒に強い印象を残している。



学校交流 歓迎式での本校の出し物ソーラン

さらに、2012年からは、現地の大学生がガイドとなって生徒がグループ行動をするプログラムを組み込んでいる。日本を発つ前に、それぞれのグループでどこへ行くかを決め、当日はシンガポールの大学生がガイドとなって行動するのである。生徒にとっては自分が行ってみたい所へ実際に行ける楽しさ、それ

(2012年7月21日出発)

- 1日目 大阪からシンガポールへ、そのままマレーシア（ジョホールバル）まで移動
- 2日目 マレーシアでホームビジット
- 3日目 マレーシアで学校交流※、その後シンガポールへ移動、大学生と行動
- 4日目 マーライオン公園・教会・ジュロンドバードパークなどシンガポール内観光
晩にナイトサファリ・深夜の帰国便
- 5日目 朝大阪着
※シンガポールでの学校交流に不都合が生じたためマレーシアの学校と交流

に、海外という緊張感もあるプログラムとなっている。



学校交流 別れる時の一コマ

課題

このように見えてくると、最初は事情のよくわからない海外、しかも言葉も通じないとあって、とにかく団体ではぐれないように「観光」をメインにした修学旅行であったが、現在はグループ行動にその中心が移動しつつある。そして、マレーシア、特にシンガポールはそれが可能な地域である。また、現地の人との交流を増やすことで生徒の満足度も高くなっている。

ただ、海外へではる場合考えておかなければならないのがリスクマネジメントである。本



マーライオン公園で

校でも2001年の「9・11」の年は、保護者の強い不安のために海外への修学旅行を断念し、沖縄に変更せざるを得なかった。また、その後の、SARSや新型インフルエンザのときにも実施するの可否か、非常に難しい選択を迫られたが、幸い保護者の理解のもと、実施することができた。しかし、今後このような事態が起こる可能性は充分にあり、それを覚悟しておかなければならない。